

# 形態的特徴と DNA バーコードに基づく、山口県でオウトウショウ ジョウバエに寄生していたツヤヤドリタマバチの同定

○阿部芳久<sup>1</sup>・井手竜也<sup>2</sup>

<sup>1</sup>九州大学

<sup>2</sup>国立科学博物館

オウトウショウジョウバエ *Drosophila suzukii* は東アジア原産で、幼虫がオウトウやブルーベリー等の果実を加害する。本種は近年、アメリカ合衆国やヨーロッパの国々に侵入して果実生産に大きな被害を与えており、米国では本種の原因からその寄生蜂を導入することによる伝統的生物的防除が検討されている。日本国内でもオウトウショウジョウバエはブルーベリーなどの果実に被害を与えるため、寄生蜂を用いた防除に期待が集まっている。そこで、寄生蜂を用いた生物的防除の基礎的研究の一環として、山口県内でブルーベリーの果実を加害していたオウトウショウジョウバエの蛹から羽化した寄生蜂4個体の同定を試みた。まず、形態を精査したところ、これら4個体はいずれも *Ganaspis brasiliensis* と同定された。先行研究により、本寄生蜂にはミトコンドリアの DNA バーコード領域 (COI) の塩基配列で識別できる五つの個体群 (G1-G5) が知られていた。G1 だけがオウトウショウジョウバエを寄主としていた個体を含むが、東京や仙台から得られていた。一方、G3 は寄主が不明であるが、山口により近い鹿児島から得られていた。そこで次に、山口県産 *G. brasiliensis* 4 個体がどの個体群に属するかを明らかにするため、DNA バーコード領域の塩基配列を調べたところ、いずれも G1 に属することがわかった。今後、G1 がオウトウショウジョウバエのみを寄主にするか否かを明らかにする必要がある。もし G1 が単食性であれば生物的防除資材として利用できるか検討する価値がある。加えて、G1 と他の同種個体群との生殖的隔離および形態的相違の有無についてさらなる検討が望まれる。

Identification of the eucoiline wasp parasitic on *Drosophila suzukii* in Yamaguchi Prefecture, Japan, based on morphological characteristics and DNA barcoding.

Yoshihisa Abe<sup>1</sup>, Tatsuya Ide<sup>2</sup>

<sup>1</sup>Kyushu University

<sup>2</sup>National Museum of Nature and Science